起句（01）　静かなり隣家（となり）どう聞く鵺（ぬえ）の声　笈羅
（02）　夜目にも著（しる）き十薬の白　七緒
（03）　黎明（しののめ）に蓮の蕾のはじかみて　恆雄
（04）　サックス響く梅雨明けの街　以和於
月（05）　いい月だ妻も子もいる夕涼み　七
折端（06）　ぬっと顔出す印半天　笈
折立（07）　今朝の秋目にはさやかに見えねども　以
恋（08）　鬼灯市に手と手触れ合い　恆
（09）　遙かなる帰る燕の路はどれ　笈
（10）　コスモスの影君の寝顔に　恆
（11）　野分する環状列石削るほど　七
（12）　綿入羽織のアメフト選手　以
月（13）　寒月の刃に梳（す）かれ雲駿（はや）し　恆
（14）　壺焼き芋の匂い漂う　笈
（15）　憂国忌国を憂いて国滅ぶ　以
花（16）　全学ストも陽炎のなか　七
（17）　歓迎会延期となって花疲れ　以
折端（18）　赤風船の放たれて宙（そら）　笈
折立（19）　蝶々の行方分からず網を置く　恆
（20）　雨粒を描く守一画伯　七
（21）　池袋立教過ぎて要町　笈
（22）　定例の集い亡き人の席　恆
（23）　さくらんぼ不味そうに食う作家あり　七
（24）　おととい貰った鯖鮓どうする　以
恋（25）　紗（うすぎぬ）に肢体艶やか宵の口　恆
（26）　あちこちの窓そろりと開く　七
（27）　国分寺・立川間で急停車　以
（28）　鹿の親子が堂々歩く　笈
月（29）　狩猟館フランツの霊満月に　七
折端（30）　茸の襞から有象無象が　恆
折立（31）　枝豆を扱（しご）いて笊に盛りにけり　笈
（32）　囓ってはまた灯火親しむ　以
（33）　いつまでも終わりのこない物語　恆
（34）　春の東京めぐる爺婆（じじばば）　七
花（35）　花筏次の泊りはどこの淀　笈
（36）　スプリングコートをクリーニング屋へ　以